

センタージャーナル

■発行人／荒山 淳

■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター

〒460-0016
名古屋市中区橋二丁目8番55号
TEL (052) 323-3686
FAX (052) 332-0900



新築された、同朋会館と研修道場を繋ぐ和敬堂にて（8面に関連記事）

（写真の無断転用はご遠慮ください）

立つ！
いのちの大地に
聞く！
いのちの叫びを
真実の学びから、
今を生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。

もくじ

- ・聖典研修 第3回 親鸞聖人の御生涯に聞く 誕生と出家 ②・③
- ・現代社会と真宗教化 小さな命の意味を考える -あの日の大川小学校の校庭から学ぶこと(後編) ④・⑤
- ・大谷派の近現代史 講義抄録「反戦僧侶・竹中彰元」 ⑥・⑦
- ・INFORMATION ⑧

◆イラストカット集（※寺報などにご利用ください）

相好金山のごとし——私にとって真宗本廟とは——

第十二期研究生本廟奉仕団が「私にとって真宗本廟とは」のテーマのもと二泊三日で行われた。同朋会館と研修道場を繋ぐ「和敬堂」がこのたび完成し、壁には百年前の両堂の瓦、すなわち両堂再建以来、参詣者の念仏の声を聴き続け、念仏の声の染み入った瓦が取り入れられ、透き通ったガラスの透明感と燦銀の瓦とのコントラストは、まさに圧巻である。

真宗本廟の願いを体解する日程の中、池田徹教導は、「真宗仏事は全ての法要において、一人の人間が、誕生から還浄（命終）まで念仏申す願いの中で培われてきた。儀式にまでなった本願念仏は、我らに生きる力と悩む力を与え続けてきた」と、生活者・親鸞の実像を通じてご講義くださった。

師仏を敬愛し捧げまつる讃嘆供養を儀式という。儀式は自ずと聞思となり、日々の聞法によって、聞法した人自身が日々、明らかになっていく。そのことを宗祖は『讚阿弥陀仏偈和讃』に、
一 一のはなのなかよりは
三十六百千億の
仏身もひかりもひとしくて
相好金山のごとくなり

と述べられる。自身が明らかになるこ

とにより、一一の華より三十六百千億の光明を出す。その光明のなかに、念仏者はひとしく三十六百千億の仏と出される。そして、縁あって出あった全存在に相好金山の如き尊厳を見出すことが始まる。私が自身の肉眼で「つまらん奴だ」と決めつけていた人も、自分の都合でしかとらえることのできない私自身を教えていく人だと知らされてくる。見た目だけでなく、その人を成り立たせている歴史的背景、因位の願心を見るのである。

その因位の願心を見たとき、頭を下げずにはおれぬ意義を感じる。頭を下げずにはおれぬ意義を見出したことを「好」、相好金山と表される。どのような人間も共に等しく自身を、かくあらしめた因位の願心を証する尊重すべき存在なのである。

仏道の原則は、法に依りて他に依る事なき道である。人の相を自らの分別心でとらえるなら、それは仏道ではない、外道である。念仏の声の染み入った瓦の意匠を見るとき、自らの分別心のみで生き抜こうと躍起になっている自身の心の内が、透き通ったガラスにさやかに映し出されるのである。

（主幹 荒山 淳）

聖典研修

2018年1月22日

親鸞聖人の御生涯に聞く

第三回 誕生と出家

講師 東館 紹見氏 (大谷大学教授)



家業が生涯に与えた影響

今日は親鸞聖人の誕生からお話ししたいと思います。私達は、自分では、はかることのできない生をいただいてこの世に生まれます。自身を取り巻く環境にしても、自分が選んだものではなく、与えられたものです。そして、与えられた環境が様々な出遇いを生んでその人の中で展開し、人生の姿となっていくのだと思います。そういう意味で、聖人がどういう所に生を受けられたのかということ

は、大事なことだと考えます。最初に、親鸞聖人の世系(世俗的な生まれ)について、そのことが聖人の生涯にどのような影響を与えたのか。『御伝鈔』冒頭にはその家系を築いた人々が挙げられていますが、経歴を見ますと、その多くが文章博士や式部大輔など、文筆的なことを仕事にする役職に就かれています。式部大輔とは、式部省(今でいう文部科学省の仕事と儀式関係を担う部署)の卿(今でいう大臣)のもとで実務を束ねる責任者のことです。

例えば「弼宰相有国卿」(『聖典』七二四頁)という方について。この藤原

有国(九四一〜一〇二二)という方は、今から千年ほど前、藤原道長の時代に活躍した大変著名な学者で、従二位という高い位についた政治家貴族でもありました。そして、文筆的な仕事をもって朝廷に仕える文人貴族という日野家の性格を定めたのもこの方です。その有国から数えて「五代の孫、皇太后宮大進有範の子」(『聖典』七二四頁)が親鸞聖人であると『御伝鈔』ではされています。

このように、聖人の出自である日野流藤原氏は文筆の実務的な仕事全体を束ねていく責任者の家系でした。文筆の仕事をするためには、仏教や儒教に通じていなければなりません。政治的な事柄を形作るうえで必要な法律などは、上下の秩序を重んじる儒教の考え方に基づいていたからです。そして仏教は、支配体制を正当化し、社会全体を一つにまとめるべくためにも重要視されました。ですから、彼らの知識の量は大変に広汎なものだったのです。家の仕事として、子どもの時から必要な知識を教えられていくのです。この幼い頃の教育を、おそらく親鸞聖人も受けていたと思われまます。

このことについて、宇都宮啓吾先生と

いう国文学の研究者が、中世の僧侶や学者が漢文を読んでいく時に付ける「訓点」を研究する立場から言及されています。先生は、『教行信証』に付された訓点を調べた結果、親鸞聖人が漢文を読む際に付した訓点と、藤原家に属する学者が漢文を読む際に使用した訓点とは矛盾しないと言われました。つまり、親鸞聖人が幼い頃に学んだことが、『教行信証』の執筆にも反映されている可能性が高いということなのです。

他にも、聖人は文字が持つ意味の違いを認識したうえで、厳密に使い分けています。文章を書かれる際、他では見られないご自身の読み方をされる時も、きちんと意味などを確認しておられます。文字に対して非常に厳密な姿勢を親鸞聖人は生涯にわたって持ち続けられました。その背景には幼き日の教育、つまり家系の影響があったと察せられます。

身分の低い貴族だったのか？

聖人の出自である日野家について「身分の低い貧しい貴族だった」と言われることもあります。この見解にはやや疑問が残ります。貴族身分の区分について少しお話ししますと、昔は家柄により、就くことのできる役職の上限が決まられていました。大臣になることができるのは摂関家やそのすぐ下の家柄の出身者であり、さらにその下に実務を行っていく

家柄の貴族達がいたのです。

位としては、一番上の「正一位」から「三位」までを「公卿」、その下の「五位」までの者を「諸大夫」といいます。前に少し触れましたが、「大夫」とは実務を束ねる責任者です。そして「六位以下」を「地下官人」といいます。

この中、公卿から上の位の貴族は無条件で、御所内の天皇が住んでいる清涼殿に昇殿することが許されていました。というのも、清涼殿では重要な儀式や会議が開かれるからであり、換言すれば、天皇の一番近くにいたのがこうした身分の人達だったということです。一方で、六位以下の官人は基本的に昇殿できませんでした。何年仕事をしていても許されなかったのです。

では、日野家の人々はどうだったか。日野流藤原氏には四位・五位の身分を持つ人が多くいますが、これらの貴族達は許可を得れば、昇殿が可能でした(「殿上人」)。四位・五位の全員が無条件で、というわけではないのですが、昇殿はできるのです。そして歴史的に、三位以上を上級貴族、四位・五位を中級貴族、六位以下を下級官人と言われることを考えても、親鸞聖人の家は、明確に貴族であり、その中でもいわゆる世俗的な身分は決して低いものであったとはいえませんが、ですから、その生活が貧しく厳しいものだったと即断することはできないと思います。

民衆と関わらない貴族

日野家は、国家・社会のあるべき姿を文章で表現すること（文章経国思想）を仕事とし、貴族による政治の正当性に関与してきました。仏教思想などを用いながら、人々をまとめあげていくことのできる政治的な文章を作るのですが、自分の好きなように書けるわけではありません。自身が仕える権力者が納得する文章になるよう、何度も書き直しをさせられることもあるのです。

一方で、社会の方向を形作る貴族と、その社会の中で生きる一般民衆とが直接的な交流を持つことはほとんどありませんでした。親鸞聖人が出家をした年から翌年にかけて養和の大飢饉が起り、餓死者数万人が衢にあふれるという悲惨な状況が一般社会でありました。そのような中で、土地を持っている者は、自分の生活を守るために必死に争います。武力と武力で衝突し、結果、武士達が重宝され力を持ち始めるのです。貴族も、比叡山などの寺社も経営に必死でしたから、庶民においても本当に大変な時代であります。

留意したいのは、このような時代社会において、貴族の世系に由来する親鸞聖人が置かれた状況と、一般社会の状況との違いです。親鸞聖人をはじめとする貴族出身者などは、出家以後もその世系に由来する一定の支えが存在し続けまし

た。親鸞聖人においては、そのことが大きな問題になったのではないかと思えます。一般民衆の厳しい状況に直接関わることもなく、支配者である自分達が生き延びることを模索し続ける権力者。そして社会に寄生し、社会からの収奪によって生活している、貴族社会や大寺院の現実。それはつまり、その階層に属する自身の生家、そしてそれらによって生活を支えられている聖人ご自身の現実でもあったのです。

幼き頃の親鸞聖人がこのような現実を批判するために「仏教とは何か」「政治とはどういうものか」と考えていたわけではないでしょうが、その問いを純粹に肌で感じ取ることが多かったのではないのでしょうか。聖人の仏教や政治の姿に対する深い眼差しを考えますと、このような世系に関わる現実社会の問題が影響しているように思います。

有名なものとしては『教行信証』「後序」の念仏弾圧に関する記述です。天皇の名前を順に挙げながら弾圧の経緯を押さえ、「洛都の儒林」すなわち文人貴族に対する厳しい批判をされています。他にも、曇鸞大師に関する御和讃もそうです。世俗の君子が曇鸞大師を非常に大切になさって礼拝されたということを繰り返しおっしゃっています。

このような記述は他の方にはあまり見られない、親鸞聖人独自の受け止めのように思います。これらは、自身が依り所

とする仏教を権威付けるための記述などではもちろんなく、仏教と政治とが関わる在り方を示しておられるものではないかと思えます。聖人は、仏教の教えと現実の社会とのあるべき関係について、考え続けておられたと思うのです。

自分の選びに先立つもの

このように、親鸞聖人の誕生の背景にある出自（世系）というものは、聖人の人間観・人生観・仏教観の形成において非常に重要なものであったと考えられます。これらが比叡山での一乗思想との出会いと相まって、聖人の中で大きな課題となったでしょう。自分では、はかることのできない与えられたものが、親鸞聖人の生涯の歩みに与えた影響は、決して小さなものではなかったと思います。

また、聖人の出家についても同様に、自分の選びに先立つものがあつたと思えます。貴族社会の動乱の中、一族の生活を維持し、また一方で仏教界との関係を築いていくために、次男・三男などが寺社勢力に入るといったことは数多くありました。例えば、親鸞聖人出家の師とされる慈円は、天台座主に四度も就任しましたが、この人は摂政・関白を出す摂関家の出身です。ご自身は座主として比叡山の経営に当たりましたが、その兄である九条兼実も摂政・関白を長くつとめました。

つまり、全員が貴族社会に居続けると生き残るのが大変なので、別の権門である寺社に嫡流以外の出身者をそれぞれ送り込むのです。これはどの階層にも見られたことでした。そして世俗社会と宗教界それぞれにありつつ、互いに補充し合う関係を築いていくのです。ですから、この時代の世俗社会と寺院仏教界との垣根は非常に低いものでした。どちらにも、一番下の階層には荘園で働く農民などが存在しました。世俗の身分秩序がそのまま、仏教界にも適用されたのです。

さて、親鸞聖人の出家の動機は様々に言われますが、明確にすることはできません。出家の際に詠まれたとされる「明日ありと」という和歌の伝承も、一七〇〇年代後半の史料である『御絵伝教授鈔』などまで遡ることはできませんが、それ以前の史料では確認できないのです。そういった意味で、聖人の内面における出家の動機を断言することはできないのです。ただ、平安時代末期の社会状況が、出家の背景に存在することは間違いないことでしょう。そして先にも述べた通り、これらの生まれもって与えられた状況が、親鸞聖人の比叡山修学時代にとどまらず、その後の仏道の歩みにも大きな影響を与えたというその事実を、私たちはもう一度見つめ直す必要があるのではないかと思います。

現代社会と
真宗教

小さな命の意味を考える

—あの日の大川小学校の校庭から学ぶこと(後編)

小さな命の意味を考える会 代表 佐藤敏郎さん



前号では前編として、佐藤さんのお子様を含む多くの命が犠牲になった、東日本大震災当日の大川小学校の概要を辿った。

今号では、「なぜ学校(組織)管理下であれほどの事故が起きたのか」という佐藤さんの検証を通し、あの日あの場所に限定されない、あらゆる人の生死に通底する課題の共有を願い、後編を掲載いたします。



大川小学校跡地。今後、震災遺構として残される

命が最優先であったかどうか

災害時に命を救う条件は、「時間・情報・手段」の三つだといわれています。大川小学校には全てがありました。それでも命を救えなかったということは、それ

が条件の全てではないということです。命を救うのは「判断と行動」です。これに結びつかなければだめなのです。

つまり、検証しなければならぬのは避難行動をした最後の一分間ではなく、その前の校庭にとどまり続けた五十分間です。その間に命が最優先だと判断し、「とにかく死ぬな、ここじゃだめだ」と行動しなければならなかった。しかし、それを邪魔した何かがあったように思います。そして、発災前の防災計画も検証が必要です。よく「パニックが起きた時のために決め事をせよ」と言われます。大川小学校にも「津波の時は、近隣の空き地か公園に逃げる」と明記された防災マニュアルが学校に保管され、教育委員会にも提出されていました。ところが、近くには空き地も公園もないのです。つまりこれは命を守るためのマニュアルではなく、提出するためのマニュアルだったのです。

災害時だけ大切なのではない

二〇一二年、私たちは県の教育委員会

の指示を受け、分厚いマニュアルを作り直しました。しかし、どれだけ詳細に作っても、緊急時には分厚いマニュアルを棚の奥から出して調べている余裕はありません。「想定外だったから救えませんでした」という防災計画ではだめなのです。なぜなら、命に関わるような災害は必ず想定外だからです。

大切なのは、日頃の習慣と信頼です。普段からマニュアルをすぐに持ち出せるようにして、随時、項目の追加や差し替えをし、それを職員間で回覧・共有をする。併せて避難経路やマニュアルを要約した一枚物を各所に貼っておく。奥にしまい込んでいる防災用品は出しやすい場所や目につく場所に移動する。普段から、言わなくても、見なくてもわかるものを増やすことが大切です。

水や食べ物や電気など、あの時に大事だったことは、実は普段の生活でも大事なことなのだといふことができました。絆、信頼、夢、希望ということも、災害が起きて急に大事になったわけではありません。命もそうです。普段から大事にしているからこそ、いざという時に守れるのです。

「ただいま」と言いあえる地域づくり

震災当時、中学生だった長女は、作文に「いつもの自分を失って、ホントの自分が見えてきた」と書きました。いつも当たり前にあると思っていたものがなくなった。町が流され、学校も、自転車も、そして妹も。そして、それまでそれに寄りかかっていた自分が付いたと。

彼女は三月十一日の朝、妹のみずほに「お姉ちゃんおはよう」と言われました。で

も、なんだか忙しくして返事を返せなかった。私たちは、身近な人に「おはよう」と挨拶することなんていつでもできると思っっています。でも、妹と最後の朝の「おはよう」を交わさなかった。こんなに後悔したことはないと言っていました。

私は防災教室で小中学生に話をするのですが、防災は難しいことはありません。「ただいま」を今日も元氣よく言いなさい、これが防災です。つまり「家に帰るまで絶対に死ぬな、どんなことがあっても生きて帰ってこい」ということです。そんな「ただいま」と帰るのが楽しみな家庭づくり、みんなで「ただいま」や「おかえり」を言いあえる地域づくり、それが防災の根本だと思います。

何に一生懸命なのか

あれほどのが起きたのに、教育委員会の対応は残念で仕方がありません。「重く受け止めます」「今後検討します」「資料を捨てました」「議事録はありません」「うっかり忘れてました」「検証中、係争中なのでお答えできません」「担当者が変わりました」という決まり文句の繰り返しです。生き残った子どもたちが懸命に証言したことも、都合の悪い部分は報告書から削除し、メモや資料は一斉に捨て、「子どもの記憶は変わるし、信用できない」と言います。

教育委員会の対応を批判することは簡単ですが、中にいる人たちはみんな私の知り合いで、同僚としてお世話になった人もいます。私の気持ちも理解してはくはすです。一生懸命に仕事をしています。しかし問題は「何に一生懸命なのか」と



みずほちゃんが残した最後のメッセージ

いうことです。守ろうとしているものは一体何なのか。あの日の校庭もそうだったのかもしれない。先生たちも一生懸命だったと思いますが、真ん中に子ども命があったのかどうか。

前例のない災害には、前例のない事後対応が求められます。慣例やマニュアルが絶対に正しいとは限らない。その時に必要なのは、違う立場の様々な意見です。ところが、対立や批判を恐れて誰も言い出せない。あの日の校庭も同じだったのではないのでしょうか。

いつかドアは開く

違う立場や意見が出た時に大切なのは、対立ではなく調和（ハーモニー）だと思うのです。同じ音を出すのではなく、自分の音をしっかりと出すこと、そして他の音もよく聞くことです。そうすれば、ドでもミでもソでもない、新しい音が生まれるはずですよ。

調和は簡単にはできません。私たちはついつい同じ音に合わせよう、耳を塞ごう、黙ってしよう、あるいは自分だけ大きな音を出そうとしてしまう。しかし、それでは本当に大事なことが優先されなかったり、みんなが「だめだ」と思ってい

るのに、誰も何も言えないまま物事が進んでしまいます。

みずほは習字がとても好きでした。後に勉強部屋から「旅立ち」と書かれた習字がいっぱい出てきました。みずほが最後に一生懸命練習したその年の書き初め展のお題です。今になってそれは、残された私たちへの大切なメッセージになりました。今感じていること、向き合っていること、悩んでいることの本当の意味は、みずほの習字のようにずっと先になつてから見えてくるのかもしれませんが。

だから、私は教育委員会の人たちとも調和できると思います。難しいかもしれませんが、私はノックし続けます。いつかドアが開くことを願いながら。

悲しみと穏やかさの両立

津波をかぶった大川小学校の教室に、今でも子どもたちの名前のシールが綺麗に残っています。「〇〇ちゃんってどんな子かな？仲良くしたいな、楽しい学級にしたいな」と先生たちが思いを込めて貼ってくれたシールです。津波にも流されなかった、夢や希望、命の証です。あの場所にはそういった証がたくさんあります。私はテレビや新聞などの取材は断らずに、できるだけ対応することになっています。

多くの人が知るべきだし、覚えていてほしいと思います。反面、その記事や番組を見てほしくない、忘れてほしい、という気持ちもどこかにあります。めでたいことや格好いいことでメディアに出ているわけではないですから。あの出来事が夢だったらどんなにいいだろう。そっとしてほしい。それに、も

う七年以上経っています。「いつまで騒いでいるんだ」と、きつと言われているだろうし、自分でもそう思います。しかし誰も言わず、聞かず、見なくなれば、曖昧なままやがて忘れ去られます。「以前、子どもがたくさん亡くなった学校があつたけど、どこだっけ、なぜだっけ、まあいいか」となってしまう。それは嫌です。私は「忘れない」と「穏やかな気持ちになる」とは両立できると信じています。大川小学校で起きたことは、確かに「悲しい」「かわいそう」「悲惨」なことです。でも、ほんの少しでいいから、あの出来事、あの命に、未来につながる意味付けをしたいと思います。そうすれば多くの人が大切なこととして向き合っていけるはずですよ。(J)



あの日まで、夢や希望がつまった鞆やコートがかけられていた

大川小学校の出来事の検証や願いが込められた冊子がダウンロードできます

<http://sspj.jp/brochure-chiisanainochi/>



編集を終えて

震災から七年余を経てなお、あの悲しみに向き合い、言葉にし続ける声がある。

「防災なんて、ちっぽけな人間の浅知恵。なるようにしかならない」と、あの日の事実から目を背け、耳を塞ごうとする自分がある。向き合い続けるということとは、とても辛い。

「どうしたらこの穢土の苦を背負う我が身は救われるのか」というただ一点を宗祖は求められた。辿り着いたのは「浄土の真宗」だった。

どうあがいても正しくあることはできないし、どうすれば他者も自分も傷つくことも争いあうこともなく、尊重しあえるのかもわからない。しかし、わからないことやできないことと、ともなる世界「浄土」を願って生きていることは矛盾しないと佐藤さんは教えてくださっている。

各々個別の境遇を生きるほかない穢土にありながら、しかし各々の音色のまま響きあい、輝きあえる世界を願い、もがきながら言葉紡ぎ続ける佐藤さんを、宗祖は「友よ、私もだよ」とおっしゃるのではないだろうか。

もう我が子は帰らない。その悲しみを懐きつつ、「みんながたいたいとおかえりを言いあえる家を作りましょう。それが防災です」と呼びかける佐藤さんの言葉に、「願生偈」が重なって聞こえた。

あまねに 普くもろもろの衆生と共に

安楽国に往生せん

(研究員 大河内真慈)

大谷派の
近現代史

講義抄録 「反戦僧侶・竹中彰元」

大垣教区第11組明泉寺 住職

竹中眞昭氏

たけなか しんしち
竹中眞昭氏



教化センターは第29回平和展「仏教の社会活動―日中戦争と大谷派―」の開催に合わせ、反戦僧侶として知られる竹中彰元が所属した明泉寺の現住職である竹中眞昭氏を招き、平和展公開学習会を行った。【第一部】で大東仁氏（平和展スタッフ）が彰元の反戦言動の内容を解説し、【第二部】にて眞昭氏が、彰元の生き様から私たちが学ぶことについて語られた。ここに講演内容を抄録する。

【第一部】（*大東仁氏より）

彰元の反戦言動

竹中彰元は、日中戦争が勃発した一九三七（昭和十二）年に二度、反戦言動をしております。

最初の言動は九月十五日、村人に、戦争は罪悪であると同時に人類に対する敵であるから止めた方がよい、北支の方も上海の方も今占領して居る部分だけで止めた方がよい、決して国家として戦争は得なものではない。非常に損ばかりである、（中略）其の上には徒らに人馬を殺傷する意味に於て殺人的な予算だ、戦争は此の意味から言っても止めた方が国家として賢明であると考えます。

約一ヶ月後の十月十日、今度は近在の真宗大谷派の僧侶たちに、

此の度の事変に就て他人は如何考へるか知らぬが自分は侵略の様に考へる、徒らに彼我の生命を奪ひ莫大な予算を費ひ人馬の命を奪うことは大

乗的立場から見ても宜しくない、戦争は最大な罪悪だ、保定や天津を取つてどれだけの利益があるかもこの処らで戦争は止めたがよからうと発言しております。

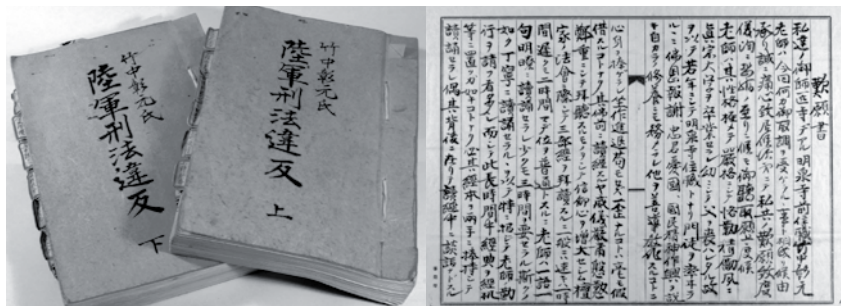
共通点として、どちらも「戦争は罪悪」、そして「戦争は得なものではない」「儲からない」とあります。仏教は損得、つまり金銭や利益を判断する教えではありませんが、耳を傾けてもらうために、敢えてこうした話題を放り込んでいるのだと思います。相違点としては、九月十五日の発言には、誰もがわかる形での「仏の教え」が出ておりません。その理由は「彰元の限界だった」と私は考えております。

九月十五日の反戦言動の理由を警察が質問した時、彰元は「出征した、赤ちゃん頃からよく知っている若者の命が心配だった」と答えております。これは村のお爺ちゃんとしては百点満点の返答ですが、僧侶としては不十分です。仏教は世界宗教です。日本人だけの命を心配するというのは身鼻頂であり、差別です。そ

ういう限界が彰元にあったのです。

「仏の教え」

それが十月十日になりますと、「徒らに彼我の生命を奪ひ」とあります。「彼」と「我」、つまり「相手」と「自分」という意味ですが、「我」というのは日本人で、「彼」というのは中国人です。「どちらの命も大事だ」と発言しております。こういう考え方が仏教です。そして「大乗的立場から見ても宜しくない」とも発言しております。大乗的立場とは、仏教的立場のことです。ここで明確に「反戦僧侶・竹中彰元」が現れています。



竹中彰元の取り調べ記録（左）と、明泉寺門徒が作成した歎願書（右）

さらに、九月十五日の発言は戦争自体を分析しておりません。「戦争はアカン」と言っているだけで、ある意味では一般論的、抽象的な戦争観です。ところが、十月十日の発言の冒頭に、「此の度の事変に就て（中略）自分は侵略の様に考へる」とあります。このように戦争を分析して「侵略」という結論を出す「社会科学の視点」と、「敵味方両方の命を奪うから、けしからん」という仏教の立場が合わさっているのです。

一ヶ月も経っていないその間に一体、何があったのか。九月十五日の発言の際、彰元は村人から叱られていました。「老僧、老碌してからに」とまで酷いことを言われています。しかしそこで「要らんことを言つたな」ではなく、仏の教えを学び続けた。そして現実、つまり今の社会に何が起きているのかということ学び続けたのです。その結果が十月十日の発言になっているということです。当時七十歳であった彰元が仏さまと学び続けた、故に浄土真宗としての反戦に結び付いていた。そんな方だと思っております。

【第二部】（*竹中眞昭氏より）

彰元が知られたきっかけ

実は私は若い頃、全く彰元を知りませんでした。高校教員として働いており全くのノータッチでしたし、父親もあまり彰元のことを語ろうとはしませんでした。逮捕され有罪判決を受けた「犯罪者」ですから、息子である私に語るのも嫌だったのかな…と想像しております。

その彰元が世に知られたきっかけは、大東さんが大学生の頃、卒業論文の制作のため、戦争に反対したお坊さんについて調べられて彰元を知り、明泉寺を訪れたことです。その時に対応した父親は、簡単には資料を見せない人でしたが、何故か大東さんには「しつかり勉強しなさい」と言って資料を提供しました。本当に信用していたのだと思います。

そして、二〇〇〇年頃から毎年「彰元のつどい」という集いを明泉寺で開催していた「岐阜県宗教者の会」の方々がその論文を読まれて、署名活動をしました。本山は彰元の逮捕を受けて、布教使の資格を奪ったり、僧侶の位を最下位にしたという処罰を下しており、その謝罪を求めたのです。その活動が本山を動かし、彰元の復権顕彰大会に繋がりました。

復権顕彰大会

二〇〇七年の四月頃に、大垣教務所の所長さんたちが明泉寺を訪れて、謝罪に関する話がありました。私と父親が対応して「今更、謝りに来てもらっても……」と思ったのと、「大勢の方に来てもらっても、トイレも駐車場も無いし……」という寺の事情で一度は断ったのですが、本山からの強い要望もあり、復権顕彰大会を開催することになりました。それに伴い、明泉寺の山門前に「戦争は罪悪である」と記された記念碑が建立されました。

復権顕彰大会は同年十月のことでした。その日は土砂降りりで、手伝ってくださいっている方々に申し訳ないな……と思いがながら過ごしておりましたが、あるお坊さん

たちが「これは彰元がきつと泣いておらんや。喜びの涙や」と言っておられたので、ホッとしたのを覚えております。

その後、二〇〇八年にNHK教育テレビ（現・Eテレ）で彰元に関する番組が放送されました。放送の翌朝から、大勢の方が明泉寺にお越しくださいました。ある方は金沢から、またある方は東京から。その方々に「なんでこんな田舎に、わざわざ来たの？」と聞きましたら、「こんな立派なお坊さんがいたお寺に一度お参りに行きたいと思いました」と答えてくださいました。その後も二年ほどはそのような状態が続き、ある時は観光バス六台で……ということもありました。

何故、反戦言動をしたのか

そして、皆さんが決まって聞かれる質問があります。一つは「あの怖い時代に、何故あのような発言ができたのか」ということです。下手したら牢屋に放り込まれて、最終的には死刑になる危険性もあるわけですからね。もう一つは「最初からそのような反戦言動をしたのか」ということです。そうではなく、日中戦争が



明泉寺の山門前に建立された記念碑

始まってからですね。では何故、途中から気が変わって反戦言動をしたのでしょうか。

明泉寺は、法務だけで寺を維持しているところでは困難です。彰元は全国あちこちでお説教をしながら寺を維持しておりました。逮捕を受けて布教使の資格を奪われますから、お説教をすることもできず、生活は大変だったのだらうと思うのですが、「では何故、そうなることがわかっていながらも気が変わったのか」という疑問が残ります。

彰元に直接聞いたわけではないのですが、私が思うのは、何十年間とモヤモヤしたものを抱えていたのではないかと。自分分は仏さまの教えとともに生きていますが、本山は戦争の方へ進もうとしている。そこに葛藤があったのではないかと思っております。

彰元から学ぶこと

毎年十月二十一日（彰元の命日）に大垣教区主催で「彰元のつどい」があります。大垣教区には四百程のお寺がありますが、なかなか多くの方々に参加してもらえないのが現状です。法務が忙しいのかな……と理解しておりますが、何かちょっと寂しさを感じております。そして最近はずっと参加者が減ってきています。

地元の門徒さんからは「立派なお坊さんやなあ」と前向きに捉えてもらっておりますが、私は、彰元のことを「立派やな」と言われると、「それでおしまいにしてたらアカンよ」と声をかけています。彰元のことを知るだけではなく、彰元の生

き様を通じて「自分はどうか生きるか」ということを考える材料にしてください、と。

『浄土三部経』の中に、仏さまの願いが出てきます。仏さまの「本当の人間として生きてください」という呼びかけが本願だと私は理解しております。その中で「地獄・餓鬼・畜生」の無い世界を仏さまは私たちに願っておられます。「地獄」の無い世界とは、戦争の無い世界のことです。そして「畜生」の無い世界とは「主體的に生きてください。おかしいことはおかしいと言ってください」という仏さまの願いだと思います。しかし現実には、「お坊さんは政治や社会の問題に口出しをしてはいけない」という人々も多く見えます。

大東さんは、「平和な時代に、戦争になるような背景を作ってはいけない」と言って講演をされています。本当にその通りだと思います。私があるがたいと思うのは、彰元を通じて、平和ということに積極的に取り組んでおられるお坊さんたちと知り合えたことです。今、政治や経済はどんどん前へと進んでおります。仏教は、それらの問題に対してアクセルではなくブレーキをかけ「これで良いのだろうか？」ということを問いかける一面もあると思います。前へ前へと進むだけでは、やはりダメだと思えます。

彰元の発言を「立派」と思うだけで終わらせずに、彰元の生き様から、「自分は如何に生きていけば良いのか」ということを考えるきっかけにさせていただければと思います。

研究生 真宗本廟奉仕 報告

「私にとって真宗本廟とは」

—本廟の歴史を学び、相続講の願いを確かめる—

6月5日から7日にかけて、「私にとって真宗本廟とは」のテーマのもと、教化センター研究生による真宗本廟奉仕を行った。それに先立ち、5月18日に開催された事前学習会では、藤岡教務所長を講師に招き、「本廟奉仕の願い」ならびに「相続講の精神」をテーマに講義をいただいた。

今から約60年前、宗祖親鸞聖人700回御遠忌法要において、北海道教区では電車を貸し切り、約2日をかけて真宗本廟へと団体参拝に赴いた。その際、道中の車内では朝夕に正信偈が勤まり、引率の僧侶による法話が車内で放送され、聞法づくめの旅であったという。研究生からは、「今では考えられない」「道中でも聞法を欠かさないと」と驚きの声があがり、同時に、「真宗本廟に赴く」ということについて、改めて背筋が伸びるような思いを抱いた。

また、以前に藤岡所長が勤務された大聖寺教区の石川県加賀市は、人口約72,000人の小さな町であるが、昭和25年の調査では4,443の講組があった。そして今でもご門徒が直接、教務所に相続講金を納められている。ある日、大聖寺教務所で使用していない部屋の電気が付けたままになっていた際、ご門徒から「この電気代も相続講金から出ているんだぞ」と強く注意されたという。藤岡所長はこれらの経験談を踏まえ、「法義相続とはお講を続けること、本廟護

持とは相続講金を納めること」と、世話方から教えられた「相続講の精神」を研究生に熱く語られた。

そして迎えた、真宗本廟奉仕。今日まで真宗本廟として相続されてきた歴史を確かめつつ、私たちが本廟から願われていることを訊ねることを主眼に、基本日程としての清掃奉仕に加え、1日目には宗議会を傍聴、2日目には真宗本廟収骨に参拝。教導を務めてくださった池田徹氏（三重教区・西恩寺住職）の「私たちの日常がある中で非日常空間を体験することによって、日頃の自分が露呈するような場の力が真宗本廟にある」という言葉が強く印象に残った。

日程が進む中、研究生たちが積極的に他団体と交流する姿も見られ、「私にとって真宗本廟とは」を一人ひとりが確かめ、日頃は遠い本山が身近に感じられた、充実した本廟奉仕となった。

(職員 林 博行)



事前学習会で研究生に相続講の願いを語る藤岡所長(写真右)

INFORMATION

教化センター日報

■2018年3月～5月

- 3月2日 研究業務「自死遺族わかちあいの会」後援
7日 研修業務「聖典研修④」(東館紹見氏)
13日 研究生・実習「真宗門徒講座(はじめの『歎異抄』⑩)」
16日 研究業務「第29回平和展」(~22日)
20日 研究業務「第29回平和展」特別学習会
研究生・学習会「近現代真宗史」

- 4月11日 研究業務「自死遺族わかちあいの会」学習会
23日 研修業務「聖典研修⑤」(東館紹見氏)
5月8日 全国教学研究機関交流会 参加(~9日)
10日 研究業務「第29回平和展」反省会
14日 研究生・学習会「近現代真宗史」事後
研究業務「平和展」学習会
18日 研究生・学習会「真宗本廟奉仕」事前
23日 研修業務「聖典研修⑥」(東館紹見氏)
30日 研究業務「自死遺族わかちあいの会」後援

2018年度 聖典研修 親鸞聖人の御生涯に聞く～宗祖の後半生～

昨年度に引き続き、東館紹見氏(大谷大学教授)をお招きし、親鸞聖人の御生涯と、聖人が生きられた時代について学びます。

日 程	第1回 9月10日(月)	第4回 3月4日(月)
	第2回 11月12日(月)	第5回 4月22日(月)
	第3回 1月21日(月)	第6回 5月27日(月)

時 間 午後6時～午後8時

聴 講 料 1回500円/全6回券2,500円
(教師陣補のための聴講証発行)

テキスト 『真宗聖典』(名古屋教務所にて購入可)



講師：東館紹見氏

《雑感》

雑草が勢いよく群がり生えてくる季節となった。春に植えた野菜の周りにはあつというまに雑草が生い茂り、そこに虫も湧く。私は雑草を排除し、せつせと虫を駆除するのだが、すぐに次の雑草が生い茂り、そこに虫も湧く。常に闘ごつこだ。

「おいしい実が欲しいなら、文句を言わずにせつせと働きな！」野菜たちが私に語り掛ける。人間に食べられることによって「いのち」を次世代に繋ぐ野菜たち。それに負けじと、排除されても種を残し、すぐさま再生を繰り返す雑草と虫たち。どちらも凄い!

梅雨の晴れ間の陽光に照らされ光輝く「群萌」たちから、元気と腰痛をいただいた。(K.H)

■教化センター

〈開館〉月～金曜日 10:00～21:00
(土曜日・日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)

〈貸し出し〉書籍・2週間、視聴覚・1週間

～お気軽にご来館ください～

2018 あいち・平和のための戦争展

平和展資料を展示し、平和展スタッフが参加します。

【日 時】 8月16日(木)～19日(日) 午前10時～午後6時(※最終日～午後5時)

【会 場】 市民ギャラリー矢田(名古屋市東区大幸南1-1-10)

【入場料】 500円(高校生以下、障がい者および介助者 無料)

【問合せ】 2018 あいち・平和のための戦争展 実行委員会 TEL: 052-931-0070

■名古屋別院・名古屋教区・教化センターホームページ【お東ネット】<http://www.ohigashi.net>

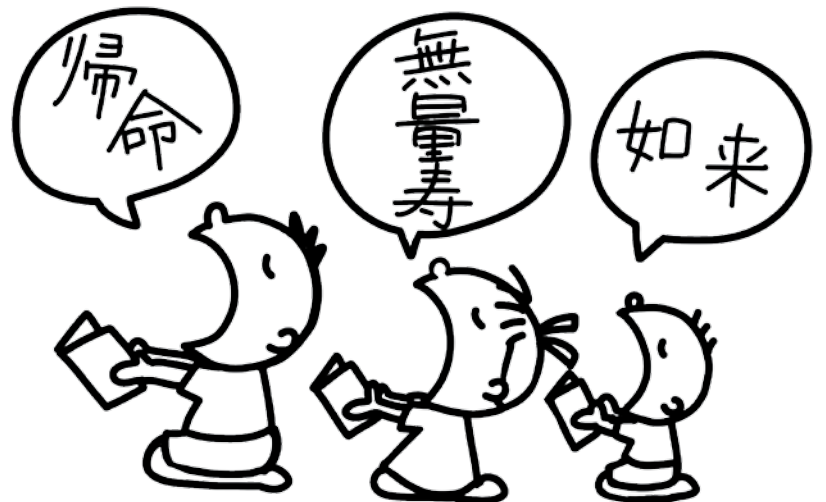
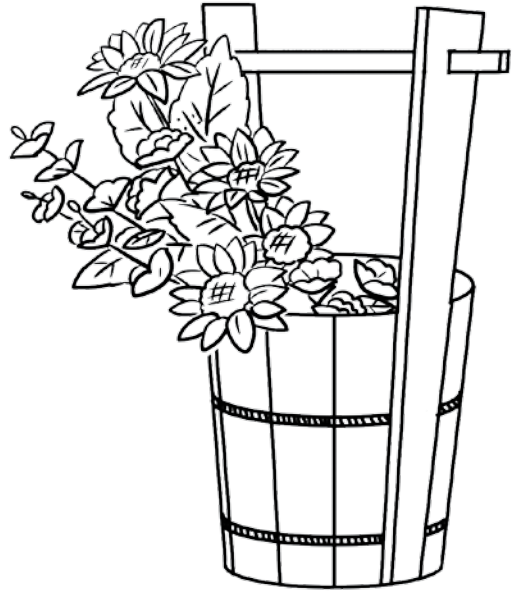
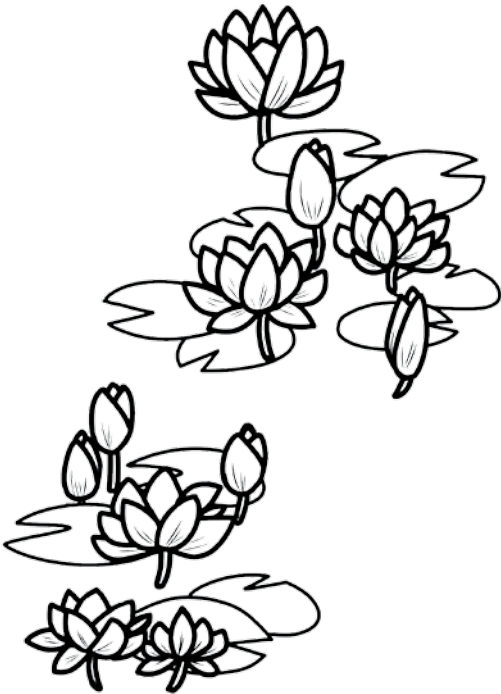
■お東ネット内で、教化センター所蔵図書・視聴覚教材を検索できます。

お東ネット

検索

イラストカット集

寺報やチラシなどにお使いください。



- データを希望される場合はお問い合わせください。
- 差支えなければ、イラストを使用された場合、教化センターまでお知らせいただくとともに、イラストを使用した印刷物などもお寄せください。

※用途にあわせて、切り貼りなどしてご使用いただけます。
※あくまでもイメージです。ご了承の上お使いください。